



あゆみ集

^ 5
6504



八五
6504

陽雲齋文庫

鳳飛一社の風友を於りて一年三秀園の詞史あり
 一昔栗北法筵を開き追福を世営む事こそ如
 ねるうて人々乃捨香は添へ眞へる俳諧若くは
 ならういふ文音兩交の句をもをひしまきよ強て其の
 三言集といふ人命不停速於山水の心も名つけ
 ありをもは又り松島をり之樂に隣坊は字唐を
 占らきしらるる母を送りて陽有北つては栗津まで
 祖の祠は道に志を吊ひ又京都よりてあらまひよ
 をとて此秋師の草池老人の作是喜いとあまのやう

陽雲齋

0/0186021938



江如松の幽こなりて昇る月 蓑甲
 層のまゝの層ぬ蚊の考 先考
 旅籠屋の沸き秋を言ふ 百杯
 和信と息子のまきまき決り 以礼
 若葉の刈ぬあひの秋ゆく 桃江
 鐘鑊の清きと断るまき 鈴煖
 紫陽花のひと艶まきまき 素晋
 時代尚徳と行む 香合 昨學

猿まき 猫を誰よのまき 近住
 洗足まきまき いらぬ 餅象立 素情
 海なるはやんと清く月の氣 機蝶
 まらく 落る 團栗のおと 管菜
 今れりま沙魚の江鮒の焼仕也 清のめ
 頂まきまき 不巻見ゆ 歌家 歌考
 まきまき 孔垂のまきまき 柳心
 揚羽の蝶は入らまき 来る 信月

ひとりもの事を何ぞいそがしく
水車
浴衣かかれとてふふ汲立
香風
正遷宮あり建つる石を井
可彫
追々抱ふひらき田のつち
一秀
かろそ免の情の今を何とかり
守耕
幼々の算本小歌く雲の根
祖心
葛麦うまの通ふ斗は下谷中
素交
親うかゆれハ子もほゆる大
江平

あつまゝの所俗の松子をよ也
為風
眩をまゝくくくくいと涙をま
為古
那芝の奇麗なふまふ毛虫
雀丸
あつまゝ及びそのちこよ三日月
山外
ら取しめたる角力を結うけし
月之
扇とすくつと然ありけ
音好
川流と小松植とハ其れ
健々
焼印あつたる牧のあら駒
為山

仲弓同士終始つらとあるあつて
 水為ひこむ 洲を武の寺 舟以
 たり置よちくく小在語を推ひもの 惟字
 南風之ーは自由なるやら 幻外
 餘は眼よち返居らき舟世帯 弘湖
 子供お手よまつ心双六 相室
 明あき本はとまう六月小見は 逸淵
 汗のよむひのとまうー湯上り 潤月

香黄此これららるる安しる 舟湖
 ちよの小書む歌本為の音 西る
 物まゝさき花よ持こむ経供養 尼外
 石小さきくーまかゝるつー州 松竹 軒池

右一吸

かしらうなるさきを招うて枯尾花 風狂也 新
 経此經とく書更り書教よ 以礼

枯て名は多し... 三 江

水は... 百 杯

花... 機 好

よ... 清 漪

耳... 院 笑

入月の隈を... 桃 江

象... 空 鳥

ま... 雅 学

志... 信 月

修... 菘 甲

買... 先 考

水... 近 位

見... 折 心

ち... 歌 考

歌... 機 操

冬... 雪 菓

埋火や残る火くわよひり云 陰の女
 つねの地よ夏暮るよまをる日 子代女
 折智をくそくよさひくわ海り流 聖川
 枯るく理を月さうり相斗 平龜
 等捨くあとの淋くき月見の 子相
 根く痛く人のうささくや二日 歎 雨
 常く香れ火の燃きうし日永の 省 己
 くりくを流く風くく重さ日 香 子

尚連井く純張てあう石藪の毛 月 年
 唐をいん唐の迹くうあまの氣 靜 和
 唱くく歌のゆきまわり流くくま 鶴 舌
 素布子れ机付まきく 飛羽 椽 下 香
 ふ対れまきく月れかろまきく 香 風
 をくくまきくくけ立あまきく脚 乞 日 二葉連
 水 車
 植智の枝接植の基や小春風 香 風

灯の月をきき 空の秋の夜 一
 枝をきき 空の秋の夜 一
 似て 似て 似て 似て 似て 似て
 空若鳥 入日の海を志す 月
 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の
 上流に 細い 細い 細い 細い 細い 細い
 歌 歌 歌 歌 歌 歌
 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の
 三 三 三 三 三 三

秋の月をきき 空の秋の夜 一
 枝をきき 空の秋の夜 一
 似て 似て 似て 似て 似て 似て
 空若鳥 入日の海を志す 月
 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の
 上流に 細い 細い 細い 細い 細い 細い
 歌 歌 歌 歌 歌 歌
 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の
 三 三 三 三 三 三

一年に 秀の 秀の 秀の 秀の 秀の 秀の
 一年に 秀の 秀の 秀の 秀の 秀の 秀の

秋の月をきき 空の秋の夜 一
 枝をきき 空の秋の夜 一
 似て 似て 似て 似て 似て 似て
 空若鳥 入日の海を志す 月
 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の
 上流に 細い 細い 細い 細い 細い 細い
 歌 歌 歌 歌 歌 歌
 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の 夕の日の
 三 三 三 三 三 三

枯芝の 芽を 芽を 芽を 芽を 芽を 芽を
 枯芝の 芽を 芽を 芽を 芽を 芽を 芽を

回交廿年仕ちみも夢よの光る
きんせらるる流芝佛の三四忌

今日より雪散る法の途り見 外

流芝佛之四忌悼

早梅よかきくさくさやき月日式 西馬

流芝佛の三四忌より句集をのり

追福をいぢまきと社友に懇たす

空くさく語り 明らんやふと音 惟叶

流芝居士大祥忌修善寺に暮を社中

けりよふされけりよふしかさるる
の事向を中侍る

おとしのきりけ過あし 花雪吹 祖心

光陰をたやしとや二十年はあ初

志都よりしとらんよりこのあ味申
のとくお月とらふとくさくまをほひ

しん人流芝佛の巻紙をいみて 為山

ちのうたを影る霜の草木日 古耕
音絶し病るる細くそけ白

流芝居士三運法蓮を以て

とて其の如く遊居の情を修む

かき野やとてと見つゝ西景あり

氷壺

流芝史古に思ふまゝに

とて

宇津此の満つ候り其意を以て

山外

一年三秀園林を以て正月

なるまゝに

綱引のつたれきれを以て

芳古

流芝下佛の休安忌日向篇を

編む社友はうらやまあり

いまも君の代なきや結魂

江平水

氷りとも鳴り夜更す小田はる

雪の

流芝居士流芝の如く

て其の如く其の如く

是の如く其の如く

今も其の如く

うらやまの如く

月之

与々を埃に凡ゆる波濤子 塞馬
 若油を流るる羨も然く喚 菊芝
 是もうひ毎より如の持るる
 省柳濱あそびるる茶 葉 波 文
 中めきよとそとるる雛子の鳴るる
 葉にまゝけ 底 流くろふ 青 可
 不自由の訓を足るる六胡のらく
 二 書
 無程より然りし致るる 水 竹

さらり也岬の帆あしと直し 石 指
 今も若れあそびるるそのま 車 石
 ちんくと兔の糞にかけまらるる
 波 文
 一葉もたら 是らぬ楊 梅 星 水
 酒を呑む茶付くもろくふさひ 青 可
 於て底まてまける内井戸 塞 馬
 月あはらるる波岸のまらるる 石 指
 いそが目白に榛の末らるる 蕨 雲

雨うらゝおひく毛尺の進なもり
 東石
 店とおも家々ふれ雑用
 石采
 甥う状がうと京を足留て
 波文
 山越しとさん大瀬の怒己
 石指
 植継しとむもちとをまし
 水竹
 又呼子鳥垣ちううぢく
 瓶筆

満望拾遺

と美園のあゝ一筆とま一筆のまら
 伊の守とまら一筆とまら

去るは去年のあゝや老の春
 水竹
 書子れとまら一筆とまら
 蓬宇
 去る夢れとまら一筆とまら
 と岳
 梅とけ果をいぬつむ身となり
 橋風
 御隣のあゝのひと雲みそ色なり
 石指
 音折れとまら一筆とまら
 塞馬

春を待たずわくわく使はれ 後河 碧山
 木や草や一度は枯る物なる 上 南輝
 又、雲はより暮せしひと毫 青菴
 春をよむ心やかしきき入日 上 伯身
 おとろく物と風なり梅さむき 秋後 大塚
 是は春の月ゆたれきそ成る山 下 好新
 雲風やききぬらうとく新 下 嵐島
 春を待たずわくわく使はれ 出 百年

名前書器

梅より春を待つ 陸奥 たよ女
 春を待たずわくわく使はれ 上 清民
 降はるの日は数 上 美泉
 梅より春を待つ 上 丁酉
 其はのきと 上 東里
 春を待たずわくわく使はれ 上 梅井
 梅より春を待つ 上 夷岸

橋邊をみよ遊童のそとよ
 西英
 雪けりや橋邊集の眼のうらみ
 大貴
 あつくと目を入よきり雉のきり
 一英
 岸多し物うん手向りの強し
 直樹
 みるしなきいよふけ共厚らや水の舟
 理園
 岸氷る氷よ等く足き古人目
 う朝英
 種返きうらや志きうよむの次
 兜川
 月よとく息よ水よ海ぬきし
 一止

大津戸のあくやきうつとむけあ
 卓^{古人}池
 山里やさうらうよさうらうらう日
 達巻
 末枯色君て暮るし海うやあの下
 洞月
 水きひくや岸のほくや志連雲
 一庭
 大の如く山の清水やむの乳
 左巻
 藤のむやまなみのこくおの紅
 梅丈
 小寺よをぬのぬひや佛生言
 牧丈

計五

芹のつよまの濁り水小田の水
 乙多感えうけてまや京東の
 何と云は田の志くく水やま
 みるくおと陣とまをむらり
 進進とまく一掃切ら子
 花さうまをまらまをまら
 いとたうまらうらまをまら
 建高まお水はらまらやまら
 樹石
 女界
 里教
 俚車
 臥曲
 鴉石
 臺所
 縮居

此多川をえま推の庭まら
 むと歩行しと叱らまをえ
 古村やまをまらまら雑らり
 山まやまらまらまら井の末
 朝泣けまらまらまら山まら
 うくまらまらまらまら山まら
 白雲はく転らまらまら池の鴨
 薺や土用明てのひとまら
 樹石
 錦水
 可相
 柳月
 菰泉
 星水
 菖蒲
 秋橘

麦まき(や)女子ま(り)の(庭)菱畑 塀 丘
 日あ(る)く(し)出(る) 暮(る)く(し)つ(つ)き(き)き
 う(く)ひ(き)ま(ま)出(る) 叱(ら)く(し)小(僧)の(乳) 月 窟
 雉子(鳴)や(白)く(く)の(目)の(乳)く(り) 六ぢん 蟬
 乃(風)う(る)ま(ま)り(け)定(ま)の(ひ)き
まま(ま)ま(ま)ら(れ)う(や)き(や)答(れ)る
 摺(込)う(出)く(月)ま(ま)う(く)ま(あ)る(ま)ま 為 中
 氷 雪
 蟬 未
 猪 水

う(き)く(葉)の(空)く(く)心(露)の(ち)つ(つ)き
 ら(れ)き(本)や(う)う(表)な(き)く(む)さ(う)り
 音(破)り(和)約(の)考(約)汗(く)き(ん) 年 3
 あ(ま)ま(り)を(か)く(芽)を(う)く(株)本(ま)ま 相 砂
 善(父)入(や)雉(を)画(ま)の(流)り(う)け 丹 井
 向(ら)く(く)く(棹)ま(あ)る(ま)ま(の)船 双 竹
 ま(ま)ま(ま)ら(れ)なく(く)く(危)掃(あ)ま(せ)ま 其 桑
 折(れ)る(ま)ん(ま)ま(ま)ま(ま)ぬ(義)の(梅) 清 泉

楠の松よきくられうまれの水 杜水
 涅槃會中雪解よくもく山は雪 泥露
 雪深一葉を浅く引 聴雨
 鳴きし降て日和和橋のあき 嵐牛
 ゆふゆや植一子苗はうきさそめ 法必
 さひーさや友あきう屋よりのゆき 耕宇
 崩さそ満さるるな一雲れぬ 自白
 一花れあまうそおよくさるれ 鳥若

人夢新くくよふなり年はゆき 後河 真山
 河うけて降きと流石よまれの雪 一 晁
 じきくの飛り都宮や森の雪 仙 蓋
 あと先よよふ所はあう 始れは 遊 人
 相好なれぬや君と和あきは風 竹 友
 茶はまよふけし物もけし乙るふ 櫻 舟
 室う桂くさむとを足さぬ木嵩ふ 六 喜

ひまの原やまらつとけしきにあさの白 けつみ
 まら其や室けり急なをささるる結 守唇
 引ゆや貝よのこころの月の照り 巻
 川魚の子をささるるや波ささるら 巻
 唯くさく海へ、砂やまけり 健山

長月や日更け里の海くさ 伊豆 文都
 益をまよひさるるささるるふらぬ 志保 立守

ねけり 尾張 直彦

雲むらわたるはちちちの影の燈来 楚江
 合衆さくやとらるる風一表海 一武
 水は城を掃ふなまきよまがらふ 鳥津
 ふきかきしるる聲を空に響かす 鵬居
 静さるる守れけりまれの白 而后
 うきよひま中流りかきまきまのゆれ 梅程
 ねりもや伏表の水に流るる 我竟

十四

ほろくと魚のぼろや暮れは 季候

あやとくま木の揺や色の中 月夜

よと目んごまきしを金の砂にう 雪庵

藤ふらふらくちぢぢり水のう 可憐

風や茶屋ぢぢのく川の縁 佳境

病をぬく人れとあまじ月小 主信法

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

雪 暮

霜散まきし時をさきしきりくは 山城 梅 室
梅影又ついでまきし和月と乱 成 幸
穠白と常なつりよ初時白 梅 通
雪は日の一日くらしし衣衣桐 未 明
築度小まきれは終り並園庭 照 池
うらひまや初うらあはれは中 有 名
まきし和網まきしすく大和邊 九 起

雪はつ川あともまきしるる雪の那 梅 林 曹
かけらつ和藤よりつる雪の音 素 屋
ぢく先くまきし籠を院む性う丸 其 山
雪はまきし本お留おはれ月 梅 所
人のまきしみちけり雪の上 畠 左

雪はまきし 紀伊 閑 那

新池の水のわがなをみんる漢語 曉梅

此より此のまをみる漢語 旦梅

梅の香はまのめい漢語 玉梅

七夕や土用を始るる夕あらし 鶴頂

白くくは光る子悪し庭の雪 兔月女

川さうりや梅を常く絶を露 蔭池

梅よりぬきや幽く水如梅巧波 風梅

七八日や月照き柳下 万像

夜はく果し白晴遊て御影 源枝

晴これと杜もくくぬ 郭公 桑葉

群蜂の中て幅き揚相伊藤 紫人

春風や春歩行きる男猫土佐 花佛

あらさや井も時を流し長安 悠々

梅

柳 水はあつくはつてぬ暑く 貞士

山の水けささくあまの木葉うら 休あ 布 団

ふきぬき度 浪はくくわうな 小 年

雪やゆきあふくれてわづらふ 涼 味

襟あつた白ひまわりや 啼 能あ 花 巾

杉の言う兒を 踏 能あ 花の明る 教 因

白牡丹を折るとれはあぬ巻ふ 雨 本

若叶の古根より出る花実生り 江 山

むくあふ落くくや 能あ 楓 下

唐と雲の巻く富士の帯 能あ 東 界

子賛をよす 力 ぬ鶴のみき 能あ 卓 文

あつあつ 能あ やう 能あ 四毎 能あ け 能あ 柳 壺

まろ 能あ 手 能あ 花 能あ 用 能あ 三 能あ ころ 能あ 山 能あ 松 能あ 成 能あ 火 夢

雉子吟や撥恙^{法宅}なく為氷 真人

まゝ是れは落^{法宅}る流^{法宅}をきや京古智 名風

淋^{法宅}るのしづつや池^{法宅}の一葉舟 呉笠

白萩やき^{法宅}く枝^{法宅}くそ^{法宅}くを咲 芝碩

月^{法宅}のあややふ^{法宅}ふ^{法宅}る^{法宅}夢の花 ^{法宅}裏^{法宅}單

松^{法宅}の^{法宅}浮^{法宅}舟^{法宅}を^{法宅}な^{法宅}く^{法宅}う^{法宅}を^{法宅}川^{法宅}に 其月

常盤のさ^{法宅}ん^{法宅}素^{法宅}烟^{法宅}や^{法宅}き^{法宅}の^{法宅}所 忍号

茶才^{法宅}は^{法宅}口^{法宅}を^{法宅}か^{法宅}と^{法宅}け^{法宅}る^{法宅}人^{法宅}あり 季因

花^{法宅}も^{法宅}ら^{法宅}し^{法宅}桐^{法宅}の^{法宅}木^{法宅}さ^{法宅}く^{法宅}なり^{法宅}ま^{法宅}け^{法宅}を 卜少

柏^{法宅}葉^{法宅}や^{法宅}あ^{法宅}そ^{法宅}な^{法宅}ひ^{法宅}道^{法宅}一^{法宅}尾^{法宅}の^{法宅}菴 ^{法宅}枕^{法宅}後^{法宅} 抱^{法宅} 儂

春^{法宅}ぬ^{法宅}花^{法宅}の^{法宅}あ^{法宅}れ^{法宅}も^{法宅}ま^{法宅}る^{法宅}れ^{法宅}て^{法宅}ま^{法宅}さ^{法宅}い 春宝

ま^{法宅}る^{法宅}年^{法宅}も^{法宅}よ^{法宅}め^{法宅}血^{法宅}ま^{法宅}や^{法宅}綱^{法宅}代^{法宅}古^{法宅}乙 良

竹^{法宅}を^{法宅}り^{法宅}を^{法宅}風^{法宅}よ^{法宅}た^{法宅}の^{法宅}も^{法宅}や^{法宅}ほ^{法宅}る^{法宅}ま^{法宅}ん 寝 眠

聖^{法宅}と^{法宅}ま^{法宅}を^{法宅}ま^{法宅}れ^{法宅}家^{法宅}友^{法宅}よ^{法宅}ま^{法宅}れ^{法宅}の^{法宅}風 茶山

月形不の物ありてや鐘氷おちの 小 鯉

雲の家に海より俄に冬の月 物 厚

空高くかきまけしものなる落葉の 一 旭

空湯花や花よきつる花汁ゆき 陸奥 江 三

人形 こころ 花より 夢 堂

風中吹くもの時より此風 永月尾

明きれたるころ春水を流る鴨 心 阿

流是行中を流る水汲 急き おん 二 丘

望日暮しあり汲より清き水 稻 海

子よりすも笑えり唐の佛の堂 漸 風

月の梅もあらず小悟き宵宿の 夢 聖 氣

懶鈍し置て見えしついで 上 雄

宿時多や春根の雪急の言はやむ 梅 辰

宿取と見えし 提 綱 昇 市

津出—此言—と九うつも_{下登} 東 足

晴城_其 其 其

岸分_其 静 里

答答_上 露 雪

引引_下 柳 塘

山_一 一 沱

息_下 文 水

新_在 年

更_武 右 良 彦

古_五 八 九

春_波 平

砂_客 三

梅_危 成

美_淡 高

陸より島尻よりやひくはひま^{江戸} 杉 竹
 う免々々や草履の重き庭の土 一 雅
 求め秘を庭樹より何りよ代は甚 丁 知
 三井の鐘耳よりひく露 之 昔 之
 庭をさゆといふこのさるはたちあし 凡 村
 掃ふを忘るる雪れをぢりよ 亦 月
 若船や汲まらるる水は色 互 爾

水よりや新しきなり初まらる 迄 流
 ぬれつゝ春立つればはは来りぬ 芝 角
 ちけけのや音壁をむの雪とら 米 山
 雖桐は鳴りうるるや小酒壺 山 方
 よいほりの日数もさくや袖夢叶 言 山
 来一をを遊るは梅はも柄付 味 舎
 かす櫃より海のみく新や言の梅 南 牧
 麦叶を踏むはさるや舞ひまら^{か年} 草 笠

昔のうらなふのそと梅の月 車郎
 海の音や、志門まうそ 波静
 磨り筆しる 意れうそんぶ 好甫
 今こひきこやうそんぶのふれ 坦
 梅を足さまやうそんぶのふれ 荷少
 晴ぬらうそやうそんぶのふれ 洪吉
 是又是の伸うら 桃の口如 龜古
 森城の梅の香は 柳のあはれ 葉風

是なりそと 是れ月 燈を巻く 大 鵬
 新聲のあつ 湯炎や 鶴の 却 由之
 川下一月を 走りて 梅は 花 瑤池
 想嘆のあつや 伏木も 梅の花 石 居
 水汲の手 拭 清さ 柳 丸 良 痛
 世宗の和 谷を 履くそと 芥の 音 山 子
 新雪のつらや 和 白 色 一 一
 初雪や 澁き 和 白 色 一 一 岸 溪

夕霧和竹此岸を置るは 秋香
志るやさし竹葉を垣まきり 宗一
承しよも世もあぬれ之鳴子鳥 秋谷
蓬来又春をぬくや船の者 謝堂
月落をまけ下まゆむし 成可
杜若香もそくそくはけり 正川 ちとし
ゆつとや誇れ眉毛もふきまき 文里
裾着て何とて小はらぬ後日 谷里

立志多中時ふかきし 柳の房 中房 可大
うき世のふ様煙をたけり 玄子
木を植て毎日さしは 源佳峰
若梅より誘引てまの梢も 幻外
車井の常河ちく兼重も 爲了
人ひけて秋を鳴えり 園の市 共雪
和弓中巻片まき 枯うつら 素行

身中一人の相おとす 鏡月 素の
 人見進まうれきみわのうり 更衣 幻 煙
 あつてもあつぬ日 け西よなうさうさ
 人の心は海にや 舟子けいしき 際 弘 湖
 南无此葉生て 橋おき友をよ 相 室
 是さくや忘せぬまはてまのぬ内 秀 何
 方角はたかたのちなり うれんこ 念
 友なり 鏡をひくや 光の花 尋 香

おをまこ 定めぬうらゝ 森の露 波 同
 水つし けあを月 浅く 枕もと 静 和
 濁るる 澄るる 水けぬ ぬみり 音 好
 暮るる 一 汐干け 雲の 鳩の 考 素 交
 月入るまこ 白梅の 朶を 涼し 石 碧
 往くうらうら みるや 舟の 舟も 暮 途 静 池
 麦もるる ぬれぬき 垣根 ぬれ 岳 険
 雛子 鳴わく みるみ ちのき さま 静 縁 錦

秋葉のぬれをきりて

造化のたまは心をとめ

秋葉の中古きと糸をまのあかり

古人

流 芝

箱根の

何もいふ目下はなるとふいけ

左

磨えたる世にひらりと相いと糸

左

中庭やあはれいふきぬ降 己元

左

桂を新とてまを吹きて鐘の利を何程そりて
月を眼目とて見れば心も感ずる事はなかりしに師
の言はるゝは蕉葉の露は秋のあまのこほり
露をよと吸はせむは赤坂の心をきく程も糸
ほきなぬりたるは蕉葉のわらうさか雪村のあけみ
ほりたるは十七字の綴りたるは秋のあけを信じて
樂とてよとあはれいふ師よわらうさかをきく程も糸
ちと相り眼とて見れば心も感ずる事はなかりしに師

小舟思ふと船元一社の比くと舟よ海に流れて星田川に
 棹を舟のうりかえんより流るる花崗の一夢を結ひつる
 一のし更なるの舟の夢をうてこつひ大祥忌に会福と森
 小舟思ふと船元一社の比くと舟よ海に流れて星田川に
 棹を舟のうりかえんより流るる花崗の一夢を結ひつる
 一のし更なるの舟の夢をうてこつひ大祥忌に会福と森
 小舟思ふと船元一社の比くと舟よ海に流れて星田川に
 棹を舟のうりかえんより流るる花崗の一夢を結ひつる
 一のし更なるの舟の夢をうてこつひ大祥忌に会福と森

續水庵養甲



日一
 子
 子
 子
 子
 子

